
白の翼、黒の翼。

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の翼、黒の翼。

【Nコード】

N3442T

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

天使失格になったアズウェルが出会ったのは…。

天使失格

気持ちのいいそよ風が吹いて、頭上の木の葉が揺れた。それを見ながらそつと目を閉じる。風の音、木の揺れる音。それ以外は何も聞こえない。

天上界は、今日も平和だ。と思っていたら、

「…エル！アズウエル！！」

木陰で昼寝していた俺の方に、黒髪のフェインが飛んできた。フェインは翼をたたむと、走ってこちらに近づいてくる。足音が俺の耳元で止まった。

「お前またこんなところで仕事サボってたのかよ！なあ、そろそろやばいって…」

「なにが」

俺は上半身を起こしながら、フェインの方を見る。ぼさぼさ頭で釣り眼の俺と違って、丸い目で黒髪のフェインはいかにも真面目そうだ。俺は笑った。こういう奴が、神サマに好かれるんだろうなあと思う。

「なにがって…アズウエルお前、このままじゃ天使失格になっちゃうぞ」

心配そうなフェインを見て、黙りこむ。

「なあアズウエル…、なんで仕事しないんだ？」

黙りこんだ俺の顔を、フェインは覗きこんだ。フェインの着ている服が、光を反射して7色に光っている。

「ちゃんと仕事すればさ、神様も…」

「ははっ」

俺は頭をかきむしりながら笑った。

「お前は本当に『天使向き』だな、フェイン」

そう言くと俺は立ち上がり、たたんでいた翼を広げた。天使に与えられる翼は白い。俺は、この翼も嫌いだった。白い翼なんて、天

使のことを綺麗に見せるための道具なんだろう。7色に光るこの服も。天使が綺麗なら神サマもきれいな存在に見える。すべては、神サマの自己満足だろう。

「待てよアズウエル！」

飛び立とうとする俺に、フェインが焦ったような声を出した。俺はフェインの方を振り返り、笑った。

「まあ、お前はせいぜい頑張れよ。『神サマ』のもとで、さ」

何か言おうとするフェインを置いて、俺は飛んだ。行き先は決まっている。

神判しんぱんの部屋。神サマの裁きを、受けるための部屋。

神判の部屋に来たことのある天使はどれくらいいるんだろうか。

少なくとも、俺が知っている限りではない。滅多なことじゃないと、こんな部屋には呼ばれない。

明かりも何も無い真っ暗な神判の部屋に、神サマの荘厳な声が響き渡る。

「…久しぶりだな、アズウエル」

俺は答えない。答えたくもない。

「何故、この部屋に呼ばれたのか分かっているな…？」

天使としての仕事をしていないから。俺は心の中で呟いた。

「お前に訊きたいことがあるのだ」

俺が返事をしないのは無視して、神サマが問う。

「なぜ、私の言うことを聞かなくなったのだ…？何故、与えられた仕事をしなくなった？」

「…ははっ」

神サマの質問に、思わず笑ってしまった。何故？

「何故かって？そんなの簡単ですよ」

俺は上を見上げた。真っ暗で何も見えない部屋だが、この上には

神サマがいるはずだったからだ。俺はまっすぐ上を睨み、神サマに
向かって吐き捨てた。
「あんたがクズだからだよ。神サマ」

死神

『天使は常に、神のお申し付けに常に従うこと。これに反する者には罰を』

『天使失格』

『失格した者は人間界に堕ち、人間として生きること』

『ただし、神の遣いとしてふさわしい仕事をした暁には、再び天使となり、天上界へ帰還することができるであろう』

「…だったよな、確か」

人間界に向かって墮ちながら、俺は呟いた。耳元で風がごうごうと唸っていて、自分の声すらはつきりと聞こえない。神サマにこの声が聞こえているのかは、分からないけれど。

「…ばかばかしい。やるわきゃねーだろ。仕事なんて」

「俺は、…天使になりたかったわけじゃないんだ」

人間界がどんどん近付いてくる。俺は眼を閉じた。

思い出すのは温かかったあの場所。全身で愛情を確認できたあの場所。そして、しがみつけなかったあの場所。

「俺は、本当は…」

心臓の音が頭の中に心地よく響く。俺は眼を閉じて、その音を聞いていた。規則正しくリズムを刻む鼓動。その音が、少しだけ、乱れた。

真つ暗だった視界が、徐々に明るくなっていく。向こうの方で聞こえる、人々の足音、そして声。心臓の音だと思っていたのは、足音だったらしい。目を開けるとまず見えたのは、綺麗な青空だった。「……」

人気のない薄暗い路地裏。俺はそこで仰向けに倒れている。らしい。本当に人間界に墮とされたらしいが、もう少し優しく墮とせないのだろうか。どうやって着地したのかは覚えていないが、背中が痛い。背中をこすりながら、俺は上半身を起こした。ひとまず、自分の身体をチエックする。黒いTシャツの上に白のパーカー、紺色のジーパン。いつの間にか、人間界の若者の格好になっている。それから、

「…翼が出ねえ」

いくら背中に力を入れても、翼が出てくる気配はなかった。どうやら本当に、人間になってしまったらしい。

身体を起こして、光が強く差し込んでいる方へ歩いてみる。狭い路地の隙間から、人々が行き交う姿がちらほら見える。多分この路地裏を抜ければ、大通りか何かに出るのだろう。

出てみると、やはり大通りだった。せかせか歩くサラリーマンや、笑いながら歩く女子高生たち。どうやら今は朝のようだ。俺はあたりを見回して、ハツとした。

この場所を、俺は知っていた。

「…あの野郎」

神サマと言われているおっさんに向かって、吐き捨てる。聞こえちゃいないだろうが。とりあえず人の流れに沿って、俺も歩きだした。交差点に花が供えられている。そう言えばこの前、この交差点で大きな事故があった。

交差点を通り過ぎ、ガラス張りのブティックの前で立ち止まる。ガラスに映る自分の姿は、ぼさぼさ頭で釣り眼。年齢は多分、高校生くらいに見えるだろう。そしてやっぱり

「人間、になつてるよな」

服装をチェックしながら呟く。俺の姿は、どこからどう見ても人間だった。俺の隣に映っている黒いマントのやつは、どう見ても人間に見えないが。…。…。

…え？

俺はゆっくりと、自分の隣に目をやった。そこには、見ず知らずの子供が立っていた。いや、浮いていた。30cmくらい、足が地面から浮いていた。

男なのか女なのかよく分からない、かわいらしい顔。身長はかなり低い。マントにフードを付けたみたいで黒い服。そしてその両手には、…その身体には不釣り合いなくらい大きな鎌。

死神。

そう思っちゃいなや、俺は一目散に逃げ出した。とりあえず、早くあいつを撒かなければならない。ところが、

『待ってください〜い!!』

と間抜けな声を出しながら、そいつは追いかけてくる。待つてられるか、殺されるかもしれないのに!! と思っていいたら、あつという間に追いつかれた。

「ぬお!」

今度は俺が、思わず間抜けな声を出した。俺は無様に走っているが、相手は宙に浮いている。そのスピードの差はどうしようもない。追いつかれても走るのをやめない俺に、そいつは話しかけてきた。

『見えるんですか!?!』

「ああ!?!」

『見えるんですか!?!ボクのこと!?!』

「見えてるから逃げてんだよ!!決まってるだろが!」

それを聞いたそいつは嬉しそうに、俺の後ろをしつこくついてきた。必死になつて走っている俺を、周りの人間がチラチラ見ている。

「やめる馬鹿！！ついてくるんじやねえよ！」
とかなんとか一人で叫びながら走っている俺は、相当おかしなやつだったんだろう。

公園

「はあー、はあー、うえっ」

気付けば、見知った小さな公園にたどりついてた。しまったと思いつつ、ベンチに腰かける。走るのももう限界だった。

ついてきていた黒マントは息切れも何もしていない。とにかく嬉しそうな顔で、俺の方を見ている。その姿を見て、俺はため息をついた。

「くっそ……。翼さえありゃ、お前なんて簡単に振り切れるのに」

「あの、どうしてあなたにはボクのことが見えてるんですか？」

その言葉を聞いて、ハツとした。そうか。こいつの姿は、普通の人間には見えないんだ。変なところで天使の力が残ってしまっている。本当にあの神サマは何考えてんだ、と思う。

「…嘘つくのもめんどいな」

俺は、俺が元天使であることなんかを、かいつまんでそいつに話した。

「ええええ！あなた、そんな顔で天使なんですか！？」

俺の話を聞いたそいつの一言目は、これだ。まあそう思われるのも無理はないが、

「お前それ、すっげー失礼だぞ。顔で決めんなよ」

俺の言葉を聞いているのかいないのか、そいつは目を輝かせながら弾んだ声で言った。

「ボク、天使を見るのは初めてです！！」

「…俺は、おまえら死神と何回も戦ったことあるんだけどな」

ぼやいた俺の方を、信じられないような顔でそいつは見てくる。まるでツチノコでも発見したような顔だ。まあ、ツチノコを発見した人の顔なんて、見たことないけど。

「あなたは強い天使だったんですか？」

「強いつていうか、…仕事の関係上、戦うことが多かっただけ。こ
う見えても、昔はまじめに仕事してたこともあったんだよ」

「へえー…」

これ以上仕事の話が続けなくなかったので、俺は話題を変えるこ
とにした。

「ところでお前、なんでここに居るの？狩りか？」

死神は人の命を狩るときだけ、人間界に墮りてくる。となると、
今こいつがいるのも狩りをするためなのだろう。

これ以上死神なんか憑きまとわれたらたまらない。そう思って
「さつさと人間狩って、死神界に帰れよ」

と言った後、ハツとした。慌てて付け加える。

「だけど俺はやめとけ。人間だけど人間じゃないからな」

そう言いながら笑う俺に、そいつはもじもじしながら小さな声で
言った。

「あの…ボク…追放、されたんです。…死神界」

「…はあ!？」

俺は思わず大きな声を出してから、あたりを見回す。幸い、誰も
いなかった。

「だけとお前、死神の格好してるじゃないか」

俺はそいつを指さしながら言う。

「その変な黒い服、それからその大鎌!!宙に浮いてる足!!普通
の人間にはその姿が見えてないみたいだし、お前は死神だろ？」

そいつは自分の服装や足元をおどおどと見て、それから笑った。

『死神のまま、人間界に追放されたんですよ』

格差社会。俺の頭に、そんな単語がよぎった。天使の世界では、
追放される＝人間になるなのに、死神界ではただ追放されるだけら
しい。なんとということだ。俺も死神に生まれときゃよかった。…そ
れにしても、

「なんで追放されたんだ？」

『え?』

「お前はまじめそーじゃん。俺とは違ってさ」

俺は超まじめ天使のフェインのことを思い出しながら言った。この死神はどこからどう見ても真面目そうだった。俺に対しても敬語を使ってくるくらいなのに、何故追い出されたのだろう。

名前

死神の仕事は、人の命を奪うことだ。死神の大鎌で切られた人間は死ぬ。ただし死神の鎌は、人間の身体を切るわけではない。その命を、切るのだ。死神に切られた人間は病気やら事故やら、あるいは自殺して死ぬ。

ただし死神の鎌は、天使や死神に対しては普通の鎌として機能する。つまり、天使が死神の鎌に切られた場合は、身体が切れる。これが結構痛い。天使だって、血は出る。神サマに血が流れているのかは知らないが。

「…もしかしてお前、人の命を奪えない優しい死神だとかそんなのか？」

これはあり得ると思った。こいつ、死神にしてはフニヤフニヤしてるし、『殺すなんて、そんなかわいそうなこと出来ません』とか言い出しそうだ。ところが俺の予想に反して、

『いいえ。仕事はやりませ』

という答えが返ってきた。

「だったらなんで追放されたんだ？」

ますます分からない。仕事もする真面目な死神を追放する理由なんてないはずだ。

『…自分でも、よく分からないんです』

死神は、空を仰ぎながら言った。その向こうにある、俺たちがいた「上の世界」を見るかのように。

『なんで追放されたのか、ボクには分からないんです。だからボクは、最低なんです』

死神は悲しそうに少しだけ、笑った。

暖かい日差しと、少しだけ涼しい風。おそらく季節は春なんだろう

う。俺は何年も前から、この公園を上の世界から見ている。相変わらず、人気のない公園だ。

隣の死神を見る。自分は最低だと言ったときり、死神は何も話さなくなつた。下を向いて、暗い顔をしている。よっぽど思い出したくないことでもあるのかもしれない。

同じように、いつも下を向いている人間を俺は知っていた。

俺は顔をあげて、公園の目の前にあるマンションの一角を見た。

今はカーテンの閉まっているその部屋に、「彼女」はまだいるのだろうか。忘れたいことばかり思い出して、囚われて。

「…お前、名前は？」

俺が急に声を出したので、死神は一瞬驚いてから、こちらを見た。

「え？」

死神の目を見ながら、ぶっきらぼうに言う。

「死神にもあるんだろ？名前」

それを聞いた死神は、一瞬目を丸くした。そして慌てながら、

「ル…ルキです。ルキ」

その声はかすかに震えていた。

「…アズウエル」

「え？」

「俺の、名前」

それを聞いたルキの顔が、少しだけ赤くなつた。何故か、嬉しそうだ。

「ア、アズウエルさん！！アズウエルさん！！」

早口言葉のように繰り返すルキに、思わず笑ってしまった。

「さん、はいらない。アズウエルでいい」

そう言うと、ルキの顔が真っ赤になつた。

「どした？」

「あの…」

照れたような、困惑しているようなルキ。

『よ…呼び捨てとか…したことなくて…』

友達いなかったから、と小さく付け加えるルキを見て、俺はまた「彼女」のことを思い出していた。

「…早く慣れる。俺は、さん付けされるの嫌いだ」

俺は何もないところを見ながら言った。何故か、自分も照れていた。

最初

天使の白いそれとは違って、死神の翼は漆黒だ。俺は昔から、黒い翼に憧れていた。白よりも黒の方が絶対にかっこいいと思う。汚れも目立たないし。

ルキに翼を見せてくれと頼んでみた。死神も天使も、翼なしで浮遊できるのはせいぜい地面から30cm上くらいで、空を飛ぼうと思ったら翼を出さなければならぬ。ルキの翼は今は見えないが、きつとたたんでいるはずだ。ルキだつて死神なんだから、綺麗な黒い翼を持つてるに違いない。ところがルキは

『いや、ボクのはかっこよくないですし……。汚いですから』
と苦笑した。少しだけ、泣きそうな顔で。俺はそれを見てから、この話題について触れるのはやめることにした。

ジープンのポケットを漁ると、人間界の金が出てきた。神さまが入れてくれたらしい。3万円が多いのか少ないのかは俺には分からない。多分、この金がなくなるまでに仕事をして、天使として帰って来いってことだろう。

俺は空を飛んでる鳥を見た。俺にも翼があれば、すぐにでも上の世界に帰れるんだが。まあ、帰ったところでまじめに仕事をする気もない。立ち上がると、ルキが『どこに行くんですか』と声をかけてきた。その声は少し不安そうだった。

「腹減った。メシ買いに行く」

俺は公園から見えているコンビニを指さしながら言った。

『あ……。』

それを聞いたルキは困ったように下を向いて黙り込んでしまった。やれやれ。俺はため息をついた。

「お前も来いよ。どうせ暇だろ」

我ながらぶっきらぼうな声になった。しかしルキは、その言葉を

聞いて嬉しそうに顔をあげた。

「いいんですか？」

ルキが泣きそうな顔でこちらを見てくる。本当にこいつの顔は男なのか女なのか分からない。死神にも性別はあるはずだが。

「いちいち確認してくるなよ。面倒くさい」

俺はさっさと歩きだしながら言った。

「ついてきたいんなら、一緒に来い。…一応、お前は人間界での最初の友達だ」

それを聞いたルキは顔を真っ赤にして、泣いた。

上の世界から人間界を覗いていたおかげで、人間界のシステムはほとんど知っていた。俺はコンビニで、メロンパンなるものを買った。天使は何も食べなくても大丈夫だが、やはり人間になると食べることは必要らしい。お腹がすく、という感覚を俺は初めて知った。コンビニを出ると、さっきまでいた公園のベンチに戻った。買った食べ物を取り出す。

「…おいしいんですか、メロンパンって」

天使と同じく、食べる必要のない死神のルキが訊いてきた。

「知らねえ。俺も初めて食べる」

俺はその日、初めてメロンパンを食べた。サクツとした食感と生地のがんさが、口いっぱい広がる。

俺はその日初めて、顎が落ちる、の意味を初めて知った。

彼女

シャワー付きのネットカフェで夜を過ごし、朝から夕方は公園のベンチに座るといふ生活を繰り返した。メシは、その日によって弁当やらおにぎりやらサンドイッチやらいろいろ食べるみたが、やはりメロンパンが一番うまいと思った。特に、サクサクしてるメロンパンが好みだった。

ルキは、夜になるといなくなり、朝になると戻ってきた。おそらく、狩りに行ってるとるんだらうと思う。そのことについては、ルキは何も言わなかった。

『この公園が好きなんですか？』

いつもの公園でメロンパンを食べていると、ルキが不思議そうに訊いてきた。まあ、毎日毎日同じ公園で過ごす人間も変わってるかもしれない。

「まあな」

俺はメロンパンの端っここの、一番サクサクしてる部分を味わいながら言った。目の前のマンションを見上げる。今日も、その部屋のカーテンは閉まったままだ。

彼女はきつと今日も、薄暗い部屋で一日を過ごすのだらう。何もかもに絶望して、何もかもを拒絶して。

今なら、彼女と話せる。今なら人間になったから、俺の言葉は彼女に伝わる。だけど会って、何を話すんだらう。何を言えるんだらう。

俺はその部屋のカーテンを見つめ続けた。

晩飯を買って外に出ると、ルキの姿がなかった。外で待っていると
言ったはずなのに。たまにあることなので、今更気にしない。俺は
そのままネットカフェに向かおうとして、足をとめた。
彼女はきつと今頃、マンションの屋上にいるはずだ。

「…。」

俺は踵かかとを返し、もう一度コンビニに戻った。さっき買ったはずの
お気に入りのメロンパンと、ミルクティーを買う。

焦りのせいか緊張のせいか、手が震えてメロンパンを落としかけ
た。

…会いに行こう。彼女に。

きつと俺は何もできない。だけど、話してみたかった。

屋上

狭くて薄暗い部屋が、私の世界のすべてだった。もう、3年以上カーテンはあまり開けなくなかった。他の人たちの、きらきらした姿を見たくなかったから。

朝は嫌い。自分が何もしていないのだと、一番思い知らされる時間だから。私だって本当は、かわいい制服を着て、きらきらした笑顔で高校へ通ってるはずなんだ。本当は。

唯一外に出れるのは夜になってから。それでもマンションの外に出るのは怖くて、いつも屋上へ上る。低い柵に両手をのせて、町に散らばっている光を見る。そこから見える眺めも、いつもいつも一
緒。

3年間止まったまま。時間も、景色も、私も。

だけどその日、少しだけいつもと違う風が吹いた。

「…こんばんは」

後ろの方からいきなり声を掛けられて、私はびっくりして振り返った。

私と同じ年くらいに見える、男の子。髪の毛はぼさぼさで、少し猫目。身長は170cmくらい。いまどきの男の子、って感じだった。にこやかにこちらに近づいてくる。

だけどさすがに、誰もいない屋上で二人きりとなると怖い。私が少しだけ身構えると、男の子は一瞬キョトンとしてから、

「あー、あー、そんなつもりないから」

と言って笑った。私の隣に立って、私と同じように景色を見る。「なるほど。悪くない」

そう言うと彼は、持っていたビニール袋から何かを取り出して、私に差し出した。それは、メロンパンだった。私の、大好きな。

「あげる」

彼の声は少しだけ震えていた。私は無言で、メロンパンを受け取る。彼はビニールからもう一つメロンパンを取り出すと、包みを開けた。

「あ、ミルクティーもあるから」

そう言いながら取り出したミルクティーは、私の好きな銘柄のミルクティーだった。偶然、だろうか。彼はおいしそうにメロンパンをかじっている。それを見ると、急激にお腹が減ったような気がした。そういえば、今日はまだ晩御飯を食べていない。

「…君さ、夜になるといつもここにいますよ」

言われて、ぎょっとして彼の方を振り向く。彼はメロンパンを食べながら、向こうに見える大きなビルを見ていた。

「なんで…」

小さな声でそう言うと、彼はこちらを見た。

「天使はいつも君を見ていたんですよ」

茶化したような声で、笑いながら言う。だけど、目は笑っていないかった。

「え？」

「…冗談」

そう言うと彼は頭をぼりぼりと掻いて、困ったように笑った。

「俺やっぱりさー、話しベタだな。全然面白いこと思いつかねえわ」
そう言い終わると、ふっと無表情になった。無表情なのに、何故か悲しそうに見えた。

「単刀直入に訊くけどさ。あんたは、やっぱりまだ死にたいって…いや、消えたいって思ってる？」

それを聞いて、頭の中が真っ白になった。

なんでこの人は、私のことを知っているんだろう。

過去

中学に入ってすぐ、私はいじめられるようになった。勉強もスポーツもできない、何のとりえもない私は、いじめの標的にするのにちょうどよかつたらしい。

毎日のように私の物がなくなった。そのほとんどがゴミ箱に捨てられていた。

毎日のように机や教科書に落書きされた。

「バカ」「くず」「ゴミ」「死ね」「死ね」「死ね」

なかなか消えないそれを、いつも必死になって消した。教科書の落書きは消えなかった。

毎日のようにお金を要求された。自分のお小遣いは全部取られた。親の財布にまで手を付けたこともある。

殴られたことも、蹴られたこともある。歩くだけで指をさして唾わらわれた。何をしていても、唾わらわれるようになった。

そして私は、外に出なくなつた。

引きこもるようになった私を、父は腫れものに触るように扱つた。最初のうちは励ましてくれていた母も、そのうち何も言わなくなつた。

時間が止まつた。カレンダーをどれだけめくっても、私は中学一年生の時のまま。いじめられっ子のまま。

消えたかつた。初めっから、自分はこの世にいなかったことにしてほしかつた。

毎日毎日、自分がいない世界を想像した。その世界ではきつと、

私の家族はもつと明るくて楽しいんだ。私なんかよりも強くて明るくて元気な子がこの家の子供で、毎日両親と笑って暮らすんだ。その子は普通に学校に通って、部活もして、もしかしたら恋愛もして私ができるなかったことを、その子は何でもするんだ。できるんだ。きつと。

私なんか、いなければよかったのに。初めっからいなければよかったのに。机の落書きみたいに、消せたらよかったのに。

自分で死ぬのは怖かった。だけど、死にたかった。死ねたらいいのに、と思ってた。存在を消す事が無理なら、せめて。

「勿体ないな」

その一言で、我に返った。振り向くと、メロンパンをほお張った男の子が、こちらを見ていた。何故か悲しく見える、笑顔で。

「もつたいない…?」

私は彼が言ったことを、小さな声でもう一度繰り返した。

「ああ、勿体ない。せつかくさ、お前は生まれたのに」

その言葉はもう嫌になるほど、聞いた言葉だった。

「…生きてくても生きられない人がいるのは知ってるの。だから、余計に死にたいの。なんで私なんか生きていて、生きたいと思ってる人が死んじゃうんだろうつて」

思わず、私は言い返した。それを聞いた彼は、「なるほど」と言っただけで笑った。

「分かっているじゃねーか。そうだよ。生きてくても生きられない人なんて、この世界にはいっぱいいる」

彼はそこまで言うと、メロンパンの最後の一口を口に放り込んだ。ゆっくり味わってから、飲み混む。それから、真剣な顔でこちらを見た。

「だけど、そいつらは生きてる人を恨んだりしてない。『俺が代わりに生きるから、死にたがりのお前が死んでくれ』とも思わない。

ただ、悲しいんだ。自分が生きてくても生きられなかった世界で、自ら死んでいく人を見るのは」

そう言ってから小さな声で、「あくまでも俺の話だけだな」と付け加えた。ように聞こえた。

「死にたい、って考えることが悪いことだとは思わない。立ち止まっている時間なんて勿体ないだけだ、とも思わない。ただ、自分のすべてを諦めてしまうのは、勿体ないと思う」

そう言い終わると、彼はゴミを片づけ始めた。それから私の方を見て、笑った。

「自己満足だけど、ちょっとだけでも話せてよかった。まあ、俺が一方的に話したただけだけど」

そう言い終わると、彼は階段に向かって歩き出した。私は少し考えてから、「あの！」と声をかけた。久しぶりに大きな声を出したと思う。自分の声の大きさに驚いている私の方を、彼はゆっくりと振り向いた。

「あの、…名前」

「翔しゅうおずおずと私が言うと、彼は少し考えてから
翔」

笑いながらそう言って、片手をあげた。

「じゃあな、ひな」

彼はどうして、私の名前まで知っているのだろうか。

本心

そこはとても温かくて、安心できる場所だった。だけど俺はそこにしがみつけなかった。手を離してしまった。

俺は、生まれる前に、死んでしまった。

母親の所為でもなかった。父親の所為でもなかった。誰の所為でも、なかった。

気が付いたら俺は天使と呼ばれる存在になっていて、アズウェルという名前をもらった。そして、神様にこう言われた。

『自ら命を断とうしている者を、救いなさい。それが、お前の仕事だ』

俺は必死に仕事をした。薬をたくさん飲んでいる人を、手首を切っている人を、首を吊ろうとしている人を、電車に飛び込もうとしている人を、飛び降りようとしている人を、必死になって救おうとした。その人たちを救うために、死神と戦うことも多かった。

救えた時もあるし、救えなかった時もある。

だけど、救えたらそれで終わりじゃなかった。救えた人の大半は、また同じことを繰り返した。その人たちは、死にたいと言いつつまたそしてまた薬をたくさん飲んでいる人を、また手首を切っている人を、また首を吊ろうとしている人を、また電車に飛び込もうとしている人を、また飛び降りようとしている人を、俺は必死になって助けようとした。

何度も、何度も、繰り返した。

悲しかった。自分が生きたかった世界を、自ら手放す人たちを見るのが。

虚しかった。

なんで神様は俺にこんなことさせるんだろう。俺がどんな気持ちで、仕事をしなければならぬと思ってるんだろう。きつとあの人は、何も思っていない。神様は何も分かっている。

大嫌いだ。神様も。仕事も。なにもかも。

俺は仕事をしなくなった。神様に歯向かうようになった。

俺は仕事をサボって、毎日のように彼女のことを見ていた。部屋に引きこもる彼女を。夜になったら屋上に行って、一人で泣いている彼女を。消えてしまいたい、と思っっている彼女を。俺は毎日毎日、彼女のことを見ていた。

だって、彼女は、

穢れ

いつも気づいたときには朝になっていて、ボクは愕然とする。頭を抱えて考えるけれど、分からない。どうしてここにいるのか、どうして記憶がないのか、

どうしてボクの鎌は、いつも血まみれなのか。

お前の翼は穢^{けが}れている、と言われたのはいつのことだっただろうか。皆、怯えるような眼でボクを見た。

「お前は同族殺しだ。死神が、死神を殺すなんて、認められないかい」

知らない。ボクじゃない。本当に何も知らないんです。

「お前が皆を殺したんだ」

違う、ボクじゃない。ボクじゃないのに。

「追放しろ。そいつの翼と鎌は、穢れている」

どうしてボクは何も覚えていないんだろう。

酷いことをしたはずなのに、何も覚えていないなんて。

ボクは、最低なんだ。

俺がいつも利用しているネットカフェの近くで、大きな交通事故があった。死者7人。この前もこの街で大きな事故があったばかりなのにな、と思いつながら事故現場を通る。事故現場からしばらく歩くと、野次馬が集まっているのが見えた。

「この家で昨夜、一家心中が…」

漏れ聞こえる声を聞きながら、妙だと思った。こんな短期間に、何人も人が死ぬなんて。

そう思っていたら、ルキがこちらにやってきた。相変わらずへらしている。

『アズウェルさ…！おはようございます』

呼び捨てにはまだ慣れないらしい。それに、そろそろ敬語もやめさせたい。

俺はいつもの公園に向かって歩きながら、小さな声でルキに話しかけた。ルキの姿は他の人間には見えていないわけだから、あまり大きな声で話すと不審者になってしまう。

「ルキ、お前さ。めえちゃめちゃ頑張って仕事しまくってるとか…ないよな？」

それを聞いたルキが、一瞬動きを止めた。その笑顔が、一気に曇る。

『どういう意味ですか』

「いやなんか…。最近ここらへんで事故とかさ、色々起こってるみたいだから」

ルキは少しだけ考えてから、首を振った。

『ボクじゃないです』

「そっか。そうだよな。悪い」

何となく気まづくなってしまい、沈黙する。すれ違うスーツ姿のおじさんたちが、「物騒な世の中になったなあ」と話しているのが、いやに大きく聞こえた。

『…あの、今日もメロンパンを食べるんですか？』

「気まずいと思っていたのはルキも一緒だったらいい。そわそわしたような声で、訊いてきた。」

「そうだなー。今日はクリーム入りのやつにしようかな」

なるべく明るいい声で答える。空気が少しでも軽くなるように。

「…今日は夕方から散歩でもしようかな。この時期、夕方は涼しくて気持ちいいし」

『じゃ、ボクもついていきます』

ルキはにっこりと笑って言った。空気が、ふわりと軽くなった。

黒の翼

最近、少しだけカーテンを開けるようになった。というのも、屋上で出会ったあの男の人が、毎日私の家の前にある公園に来ていることに気付いたからだ。

翔と名乗ったその人はいつも一人で公園に来ているのに、たまに誰かと喋っているように見えた。

変わった人だとは思う。だけど、怖い人だとは思わなかった。ストーカーだとも、何故か思えなかった。というか、引きこもりの私を追いかける人なんていないだろうと思う。もしもあの人がストーカーなら、目当ては私じゃなくて別の人だ。きっと。

「…今日は屋上に来るかな」

部屋で、一人呟く。あの日以来、翔さんは一度も屋上に来なかった。私はあれからずっと、毎日屋上に上っていたけど。

私がこの部屋から飛び出して、あの公園に行けば彼と話せるんだということを知ってる。きっとあの人なら、話をしてくれるだろう。だけど、行く勇気がなかった。

「…来ないかな」

そう呟いてから、カーテンを閉めた。

コンビニは24時間営業なのありがたい。夕方から町を散策していたら、すっかり夜も更けてしまった。

「うおおお、腹減ったああ。メシメシ！」

適当なコンビニに入って、晩飯を何にしようか迷ってる間にルキの姿が見えなくなった。夜に姿が見えなくなるのはいつものことなので、あまり気にせずレジへと向かう。今日の晩御飯はチキン南蛮

弁当にした。メロンパンの次にお気に入りの商品だ。

レジの店員はどうも新人らしく、もたもたと会計をしてくれる。

「お、お弁当は…温め、ますか？」

「あ、はい」

おどおどと喋る姿が、ルキに似てる。そんなことを考えながら、なんとなく外の方を見ると、

翼を広げた、ルキの姿が見えた。

その翼は漆黒で、コウモリのように尖った形をしている。

「…あ？」

俺がそう言ったのと同時に、ルキがすごい勢いで飛び立った。ルキが飛んでいった方向には、ひなのマンションがあったはずだ。

今頃ひなは、いつものように屋上にいるだろうか。

「…!!!」

俺はチキン南蛮弁当も受け取らずに、外へと飛び出した。「あ、

あの、お、お客さま」と慌てふためく新人の声が後ろから聞こえる。だが、それどころではなかった。

ひなが死ぬかもしれない。マンションに向けて一直線に飛びたい気分だった。だけど俺には翼がない。

「くそっ!!!」

出来るだけ早く、走るしかなかった。

落下

今日は少しだけ風が強かった。私は持つてきていたカーディガンを羽織って、いつものように柵の方へと近づいた。夜も遅いせいか、町は死んだように静かだった。朝になればこの街はまた息を吹き返して、皆動きだすのだろう。そして私はまた、動かなくなるのだろう。

あと何年、この生活が続くんだろう。私はいつになれば抜け出せるんだろう。もう終わりにしたい。なにもかも。

手の甲に、涙が一粒落ちた。慌てて涙を拭いながら

「…このまま朝が来なければいいのにな」と呟いたのと、

「ルキ、やめろ!!」

という叫び声が聞こえたのはほぼ同時だった。振り返ると、翔さんがこちらに向かって走ってきている。どうしたんだろう、と思った途端、強い風が吹いた。

身体がふつと軽くなる感覚。

「え…?」

私の身体は、柵を乗り越えて、空中に投げ出されていた。

屋上に着くと、いつものように柵の前で景色を見ているひなと、その横で鎌を振り上げているルキが見えた。

「ルキ、やめろ!!」

走りながら叫んだ。しかし、ルキは構わずその鎌をひなに向けて振り落とした。

命が切られる。ひなの身体が、一瞬で宙に投げ出された。

「くそおおおお!!!!」

俺は手を伸ばした。頼む、届いてくれ！！

ぎりぎりで、ひなの腕をつかんだ。よし、後は引っ張り上げれば

…！！

天使であつたなら、腕さえつかめれば簡単に引っ張り上げられたはずだ。

だけど俺は、天使じゃなくて人間だった。

走りながら、ひなの腕をつかんだ俺はそのままバランスを崩した。足が地面から離れる感覚。そしてそのまま、…ひなの腕をつかんだまま、落下した。

白の翼

落ちる。この感覚を味わうのは二回目だった。一回目は、天上界から落とされた時だ。耳元でごうごうと唸る風の音。風でもない空気が、全身に当たると感じる感覚。まるであの時と一緒に落ちたが、今回は落ちたら多分助からない。俺もひなも、人間だから。

しがみつけなかったあの日のことを思い出した。暖かい場所から放り出されて、身体が冷たくなる瞬間。全身で絶望を感じる瞬間。彼女には、同じ体験をさせたくなんてなかったのに。

結局俺は、ひなのことすら、守れなかった。

彼女のことだけは、守ってやりたかったのに。

「ごめん、な」

ぼやけた視界の中でそう呟いた。その瞬間、

俺の背中に、真っ白な翼が生えた。

落ちる…！そう思った瞬間、目をつぶった。私、多分死ぬんだ。

走馬灯でも見えるのかと思ったけど、何も見えなかった。頭に浮かんだのは、たったひとつの言葉。

…そんな、今更、なんで？

身体が落ちる感覚。空気の冷たさ。風の速さ。そのすべてに、死を感じた。もうすぐ終わるんだ、すべて。

ああ、私、本当は …

そう思った次の瞬間、身体がふわりと軽くなった。耳元で唸っていた風の音が聞こえなくなる。

「……………」

恐る恐る目を開けると、翔さんの顔がそこにはあった。

そしてその背中には、きれいな、真っ白な、羽が。

翔さんは、私をそつと公園のベンチに降ろした。

「…なるほど。人のためにどうこうすると、天使に戻る、ね…」

翔さんがぶつぶつ何かを言っているのを、私はぼうつと聞いていた。いろんなことに混乱しすぎて、頭が働いていなかった。

「ひな。俺の姿、見えてるの？」

そう訊かれて、頷いた。頷くのがやっとだった。

「そっか。…天使に戻れてんのか、よく分かんねえな」

そう言っていると翔さんは自分の羽をバサバサと動かした。そして「よし、いける」と呟くと、

「ちよつと野暮用を済ませてくる」

そう言って、屋上の方をキツと睨んだ。

「…ひなは、落ち着いたら家に戻るんだ。分かったな？」

もう一度頷く。それを見て彼は、ほほ笑んだ。

それから、彼は、

対決（前書き）

対決

飛ぶのは久しぶりだったが、案外身体はちゃんと飛び方を覚えていた。俺はひなを残して、一直線に屋上へと飛んだ。

屋上には、まだルキがいた。コウモリのような漆黒の翼。フードをかぶっているせいで、その顔はよく見えない。

「…今、その鎌に切られたらかなり痛いんだろうな」

俺は一人で呟いて、笑った。ひなには俺の姿が見えていたが、俺はもう天使に戻っている。だとしたらあの鎌で切られるのは命ではなくて、身体だ。

「コ…コ…ス…」

ルキがこちらを見て、口を大きく開けて笑った。

「そんな顔、ルキには似合わねえよ」

そう言って笑うと、俺はルキの方へと素早く飛んだ。攻撃するべき部分は分かっている。そこだけを狙うつもりだった。

だが、ルキが鎌を振るスピードは予想をはるかに超えていた。

「くっ！！」

よけたつもりだったが脇腹をかすたらしく、服につつすらと血がにじんだ。

一瞬だけひるんだ俺に、鎌を振り上げたルキが素早く突っ込んでくる。頭を狙われたがギリギリでかわした。と思った瞬間、脚を攻撃される。速い！

「だっ！！」

太ももを少し深めに切られた。鋭い痛み。思わず後退して距離をとった。

「…やっぱり痛いな」

そう言った自分は何故か、笑っていた。

ルキのことを思い出していた。翼を見せてくれと頼んだ時に、『いや、ボクのはかつこよくないですし…。汚いですから』と言って泣きそうな顔で笑ったルキを。

「…ああ、そうだな」

俺は笑った。そして、ルキの方へと突っ込んだ。

ルキが鎌を振ってくる。避けようと構えるが、完璧に避けきろうとは思っていなかった。俺の狙いは鎌を振りおろした後、ほんの瞬間だけ動作が止まるその瞬間。その瞬間を作り出すしかない。そのため、

「くれてやるよ、こんなもん」

その時きつと、俺は笑っていた。

俺の左翼が、切られる音。舞い散る白い羽。

俺の目は、自分のちぎれた翼ではなく、ルキの翼だけを見ていた。自分の翼を切られながらも、ルキの後ろへと回りこむ。そして黒い両翼の根元を、両手で掴んだ。それに反応して、ルキが暴れたそうとする。だけでもう、終わりだ。

「誰かを傷つけるだけの翼なんて、いらない」

俺はルキの翼を、引きちぎった。

真実

「お前が翼を出すと、皆が不幸になる」

「お前の翼は穢けがれている」

「お前は何人の同類たちを殺した」

違う、ボクじゃない。ボクじゃありません！

「こっちに近寄らないで。気持ち悪い」

ボクじゃないのに。信じて。誰か。

「だったらお前のその手の色はなんだ」

「鎌の色はなんだ」

赤い。赤い。紅い。

だけど、それでも。

ボクじゃ、ない。

「…やっぱりな」

引きちぎったルキの翼を見ながら、俺は独りごちた。黒い翼の根元には昆虫の脚のようなものが4本生えていて、カサカサと空を蹴っている。俺はその翼を地面に置くと、脚で何度も踏みつぶした。

翼はギギッ！！という声を何回か出し、やがて動かなくなつた。

この翼は、ルキの本当の翼ではなかつた。俺は何度か死神と対峙したことがあつたから知っていたけれど、どの死神の翼も、その形は鷲むの翼に似ていた。コウモリのような尖つた形ではなく。

死神に凶暴な寄生虫が宿ることがある、というのは文献で読んだ話だ。我ながらよく覚えていたと思う。この寄生虫は夜行性で、日中はたたんでいるが夜になると羽を広げる。寄生虫が羽を広げている間は、寄生されている死神は寄生虫に操られてしまう…。

俺は、気を失っているルキを見た。先ほどの様子からして、あの寄生虫は天使だろうが人間だろうが死神だろうが構わず攻撃していただろう。多分、ルキが死神界を追い出された原因もこいつにあるのだと思う。

ルキの目から、涙が一粒、零れて落ちた。

「…ちくしよっ」

俺はもう一度、寄生虫を踏んだ。

「あーあ。これからどうしよっかなあ」

俺は手元にある小銭を見ながら言った。残金780円。それを観たルキが、もう何度目か分からない

『ごめんなさい！！本当にごめんなさい！！』

を言った。その顔は、今にも泣きだしそうだ。

天使に戻れた俺は、その翼で天上界へと飛んで帰れるはずだったが、左翼がなくなつた今、俺は天上界へ戻る方法を失ってしまった。ルキに送ってくれと言いたいところだが、ルキはルキで天上界へ行くことはできない。一度追放された死神は、二度「上」には戻れないのがルールだった。たとえそれが、濡れ衣でも。

「良いよ別に。お前の所為じゃないし。っていうかこれ、何回言わせる気だよ」

俺はルキの泣きそうな顔を見ながら笑った。笑うと、切られた脇腹が地味に痛んだ。

俺には右翼が残っている。だが、人間にも俺の姿はきちんと見えている。天使なのか人間なのかよく分からないポジション。それが今の俺だった。だが、

「とりあえずやっぱ、バイトってやつをやるしかないかな…」

天上界へ戻れないとなると、人間界で生きることを考えるしかない。神サマはどうやら、俺が天上界へ帰るための手助けをしようとは思っていないようだ。それか、また人間を助けることができれば、俺の背中に翼が生えてきたりするんだろうか。

『あの、ボクは、…ついて行っていいんでしょうか』

言いにくそうにもじもじ喋るルキを見て、ため息をついた。それから、わざとぶっきらぼうに言った。

「初めっから言ってただろ？友達だって」
それを聞いたルキが、顔を真っ赤にして泣いた。それを見て、俺は笑った。

あの日のことを、今でも鮮明に覚えている。

「…ひなは、落ち着いたら家に戻るんだ。分かったな？」

頷いた私にほほ笑んだ彼は、

「俺はもう、この公園には来ない」

少しだけ悲しそうな顔で笑いながらそう言った。それから、私の肩にそっと手を置いた。

「…震えてる」

彼にそう言われた途端、涙があふれた。何故かはわからない。い
ろんな感情が、ごちゃ混ぜになっていた。

「落ちる瞬間、やっと死ねるって、思ったか？」

私は首を振った。あれだけ考えていたことなのに、あの瞬間はそ
んなことちつとも考えなかった。私が思ったのは

「…死にたく…ないっ…て」

泣きじゃくりながら、本当のことを言った。死ぬんだと思った瞬
間、死にたくないと思った。なんでだろう、あんなに死にたかった
のに。

それを聞いた彼はふっと笑った。とても優しい笑顔だった。

「その気持ちを、少しでもいいから大切にしてくれ」

そう言うと、自分の翼から一枚の羽を抜き取った。そして、私に
差し出した。

「天使はいつでも、ひなを見てる」

泣きやまない私に、にっこりと笑う。そして、

「男の子だったら翔！女の子だったらひな！」

空を見ながら、少し大きな声で言った。

「え……？」

「俺は男だった。だから、翔」

翔さんは私に自分の羽を握らせると、目を細めた。

「じゃあな、妹」

細めた目から一粒だけ、涙が落ちた。

私は部屋の中で、翔さんにもらった羽を見ていた。白くて、綺麗な羽。

「……。」

しばらく考えてから、カーテンをそつと開ける。そして、下の公園を覗く。けどそこに、彼の姿はなかった。

私は顔をあげた。青い空が広がっていて、外はとても温かい。

「…ちよつと、外を散歩してみようか。お兄ちゃん」

私は白い羽に、そつと囁いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3442t/>

白の翼、黒の翼。

2011年6月1日12時40分発行